

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

現代日本語の自発に関する研究  
——受身・可能との関連を視野に入れて——

氏 名

高橋 芽衣子

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、ラレル文で表される自発・受身・可能の統一的な把握を目指して、ラレル形自発及び可能動詞による自発の特徴を様々な面から考察したものである。

第1章では、受身と自発というラレル文の二種の解釈について、他動性スケールに基づいた把握を試みた。受身と、他動性の指標の一つである対象変化との間には相関が見られ、対象変化の程度を軸に、受身と自発は連続体を成すものとして捉えられる可能性を述べた。その一方で、他動性の指標である意志性を軸にすると、連続体としての把握は困難であることも確認した。対象変化の程度という指標は、統一的把握に有効である可能性が高いが、それを軸にするだけでは不十分であることから、意志性の高低・有無や、その他の指標を検討し、複合的に影響していると思われるべきであると結論付けた。

第2章では、ラレル文の話し手に注目して、ラレル文各解釈の成立条件を分析した。〈経験者〉となる人物と、その格表示、話し手のイベントへの参与の仕方を整理し、成立条件とした。自発・可能は〈経験者〉が話し手であることが多く、文中で表示される場合は二格である。受身も、〈経験者〉は二格を取るが、話し手以外であることが多い。話し手は、イベントの影響を受ける存在として参与する。尊敬は、〈経験者〉がガ格を取る。話し手が〈経験者〉となったり、イベントに参加したりすることはない。これらの条件を侵しながらも成立するラレル文では、〈経験者〉が表示される割合が高まるということも確認された。

自発と受身を共通性のある連続体として捉えようとする、第1章で試みたように、他動性の指標に注目しがちである。しかし、他動性とは接点の無い「話し手」という概念もまた、自発・受身の分析に有効であることが明らかになった。

第3章では、ラレル文の自発・受身用法を決定付ける条件を考察した。一人称主体をとり、ル形で発話時現在を指すという表明・表出文となる条件を備えた思考動詞文

においては自発、人称に制限がなく、ル形で未来を指す動作動詞として働く思考動詞文では受身が、それぞれ成立することを述べた。

他の動作動詞とは異なり、自発はある条件下において表明・表出文となる。この性質故、ラレル形自発となるのは思考動詞が典型とされる。また受身文は、変化や〈対象〉への働きかけを述べるものである。ラレル形受身となる動詞の動きは、動作の発動だけでなく、時間的な幅のある事態を表す。動作動詞としての思考動詞がこの性質を持つからこそ、〈対象〉がどうなるかということ述べるラレル形受身の解釈も可能になる。本章で明らかにした自発・受身文の成立条件は、従来の自発・受身に関する指摘とも矛盾しないことを確認した。

第4章では、可能動詞と、可能動詞による自発との関係を考察した。可能動詞はさまざまなタイプの可能を表すが、その中でも実現の有無を問題にしない評価的属性段階の可能と、実現したことを表す可能とに注目した。可能動詞による自発もまた、ラレル形の自発のようにル形で現在を指示し一人称を取るが、注目した可能動詞の性質と、これら可能動詞による自発の性質が共通することから、可能動詞においても、表出となる条件を満たし得る動詞において、自発の用法を獲得するに至ったと考えられる。

第5章では、『太陽コーパス』中の動詞「泣く」の様相から、可能動詞が自発の意味を表すようになった背景を考察した。動詞「泣く」は、動作動詞として事象を叙述し、文脈上唯一の存在である特定可能な人物を主体として取る傾向が見られ、小説というジャンルに偏って現れることを指摘した。可能動詞による自発を状態形容詞的であると把握すると、動詞「泣く」が小説において多用されることが背景となり、可能動詞が自発を表すようになったと結論付けた。また、自発の解釈がそれほど強くない可能動詞もあり、それは、特性形容詞的であると捉えられることも述べた。

今後の研究方針として挙げられるのは、まず、他動性の指標を整理することである。そのためにも、自発が表す「非意図的行為」を含めた「意図性・意志性」の検討が重要である。ラレル型自発・可能動詞による自発が表す事態内容について、他のラレル文の用法及び可能動詞の用法と比較して分析することが有効であると考えられる。